

大学生の未来の明るさの評価に関連する要因の検討

日瀧 淳子

姫路大学教育学部紀要

第10号

平成29年12月31日発行

大学生の未来の明るさの評価に関連する要因の検討

日潟 淳子

要旨

本研究では日本の大学生の未来の評価と、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態、中学校・高等学校・大学時でのクラブ・サークル活動の経験の有無、高等学校・大学での自主的なボランティア活動の経験の有無、目標とする人の有無との関連を検討した。その結果、高等学校時のボランティア活動の経験は未来の視野の広がり、大学時でのボランティア活動の経験は人生に対する積極的態を生じさせ、目標とする人がある者は未来を明るく評価していることが示された。また、それらの関連要因がどのように未来に対する明るさの評価に結びついているのかをパス解析を用いてとらえた結果、未来の明るさの評価には人生の良い面を見ようとする肯定的な態度が影響を与え、肯定的な態度には未来に対する自己実現の意識が関連し、それは高等学校時のボランティア活動の経験によって生じていることが示唆された。また、大学時のボランティア活動の経験や他者とのつながりを感じることで肯定的な態度を生じさせること、目標とする人の存在が直接的に未来の明るさの評価を高めることも示された。

キーワード：未来展望、人生への積極的態、クラブ・サークル活動、ボランティア活動

1. 問題と目的

内閣府少年企画(2013)による「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」やリクルートキャリア就職みらい研究所(2013, 2016)が行った日本の大学生に対する将来イメージの調査において、日本の大学生は将来を「明るい」と答える割合が他国よりも低いことが示されている。また、関・吉田・篠原・吉山・三角・三隅(1999)は日本、台湾、中国、オーストラリア、デンマークの大学生を対象に、働くことに対する意識や態度を調査し、日本の学生は「将来の仕事(職業)に対する目標・期待」を明確に持っているという割合が2割程度に過ぎず、他の4か国よりもかなり低いことをとらえている。未来は予測不可能であるため、未来をどのようにとらえるか、あるいは目標や期待を持てるか否かは個人の認知によるものである。なぜ、日本の大学生が自分の未来を明るいと思えないのかを明らかにするために、日潟(2014, 2015, 2016)は一連の研究を行っている。

日潟(2014)は、大学生に自分の未来に対する明るさを評価させ、その評価の理由を自由記述で回答してもらい、それを質的に分析した結果、多くの者が一つの視点のみで明るいかなんかを判断していることをとらえた。社会の中で生きていかなければならないというより現実的な視点をもって自分の未来展望を形成することが求められる大学生には、一つの視点のみで未来展望を判断するのではなく、多面的な視点を持って未来をとらえていくことが必要になる。しかし、日本の学生は多面的な視点で未来をとらえていないことがうかがえる。関ら(1999)の調査においても、日本の大学生は他国に比べて、働くことを社会に対する貢献と考えるよりも、個人に課せられた仕事ととらえ、働くことを個人的な活動として考える傾向があることが示されている。日本の大学生は職業に対しても狭い視野でとらえていると考えられる。杉本(2012)は大学生のキャリア形成において、やりたいことや好きなことへのこだわりはできないことから目をそらし、課題の先送りにつながると述べ、白井(2015)も進路選択を自分のやりたいことだけに狭めることによる危険性を指摘している。

これらの点から日潟(2015)は大学生が未来を明るいものと評

価するためには、未来展望に対する視野の広がりが必要であると考え、大学生が未来に対して何を重要とするかという視点からその様相をとらえた。その結果、社会的側面として社会に認められることを望む「社会的評価」、他者の幸福を支援することに重きを置く「社会貢献」、個人的側面として自分の心にあることを実現したり、何かを達成することを目指す「自己実現」、自分らしい人生を送ることに重きを置く「自分らしさ」、一生懸命努力する姿勢を示す「自己成長」、たくさんの人と出会うことを重要とする「他者とのつながり」の6側面を未来の視野の広がりとして得ることができた。

浦上(2015a)は職業観として、勤労の代償として生活のための収入を得るなどの経済的側面、個性をいかし社会に寄与することなどの個人的側面、社会の構成員として分担する役割を果たすことなどの社会的側面の3つを定義し、大学生を対象にこれらの3側面における職業観の特徴、および3側面に対する重要性の認識と将来の職業の不決断の関係をとらえている。その結果、日本の大学生は経済的側面を最も重要視しており、個人的側面、社会的側面はその後に続くものとして考えていた。また、経済的側面よりも個人的側面を重視し、それ以上に社会的側面に価値を置く者や3側面すべて同程度の価値を置く者は職業不決断の傾向が低くなり、経済的側面のみを重視する者やすべてに価値を置いていない者は職業不決断傾向が高かった。これらの結果から、職業に対する個人的側面と社会的側面への重視の低さが職業不決断を高める可能性があると考えられている。大学生の未来については職業選択が大きな比重を占めることを考えると、日潟(2015)がとらえた個人的側面や社会的側面、他者とのつながりなどへ未来の視野が広がることで未来の明るさに影響を与えることが予測される。

しかしながら、日潟(2015)の研究においては、未来の明るさの評価と未来の視野の広がりの間には女性には「自己実現」と「他者とのつながり」に中程度の相関がみられたものの、その他の側面では高い相関は得られず、男性においてはほとんどの側面で相関は得られなかった。そこで日潟(2016)では、未来を明るいとして評価するためには、未来に対する視野の広がりとともに、実際にそれに対する行動を行っているか否かが重要な要因であると考え、海老根

(2010) が作成した大学生の人生に対する積極的態度尺度を用い、未来の視野の広がりを実際の行動と、未来の明るさの関連をとらえた。その結果、未来の明るさと人生に対する積極的態度との間に関連がみられ、人生に対する積極的態度と未来の視野の広がりにも関連がみられた。したがって、未来の視野の広がり間接的に未来の明るさに影響を与えることが予測された。

日潟 (2015) では未来の視野の広がりを生じさせる要因として、クラブ・サークル活動やボランティア活動、目標とする人の存在をとりあげ関連をとらえた。大学生を対象に行ったクラブ・サークル活動の研究においては、クラブ・サークルに加入することで学業の両立や友人関係の種類が増えるなどの大学生活の質的な変化が生じることや、人間関係や社会性の獲得に役立っていることが示されている (新井・松井, 2003; 高橋・石井, 2008 他)。また、中高生を対象とした研究においても、クラブ・サークル活動が自己効力感や社会人基礎力を育むことが示唆されている (青木, 2004; 稲田・鈴木, 2015 他)。未来展望の形成やキャリア形成は自己効力感と関連することが示唆されている (安達, 2003; 都筑, 2007 他) ことから、クラブ・サークル活動は未来の視野の広がりにも関連すると考えられた。その結果、高等学校時のクラブ・サークル活動の経験による違いはみられなかったが、大学時のクラブ・サークル活動においては所属している者の方が未来の視野の広がりが生じていることが示された (日潟, 2015)。

ボランティア活動の研究については中央教育審議会 (2002) による「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申)」において、「青少年の現状を見ると、多くの人や社会、自然などと直接触れ合う体験の機会が乏しくなっている。—中略— 青少年の豊かな成長を支えるためには、学校や地域において、青少年に対し意図的、計画的に「奉仕活動」をはじめ多様な体験活動の機会の充実を図り、思いやりの心や豊かな人間性や社会性、自ら考え行動できる力などを培っていくことが必要である。」と述べられている。また、ボランティア活動の研究においても、ボランティア活動の経験が援助者自身に与える効果について検討されている。妹尾 (2008) は福祉系専門学校の学生を対象に援助成果と援助効果をとらえ、ボランティア活動の経験は成功的援助行動の経験から様々なことを学ぶ教育的効果をもたらすことを示している。また、山口 (2009) はボランティア活動への参加とその経験からの学習は、社会との関係にみずからを開き、その上での自己の変容 (すなわち、自己形成) にもつながっていくことを報告している。しかしながら、日潟 (2015) ではボランティア活動の経験の有無による未来の視野の広がり有意差は得られなかった。河井 (2012) は大学入学前のボランティア活動の経験が大学生生活の学習意欲へとつながることを示している。また、山本・松井 (2014) は中高生のボランティア活動の援助効果の検討を行い、中高生はボランティア活動の経験によって得られた知識が社会への関心を高めることを示している。したがって、大学入学前のボランティア活動の経験の有無もとらえる必要があり、自主的な参加によるものか、外的な要因により強制されたものであるのかによっても援助効果に違いがあると考えられるため、これらの違いを検討することが課題とされた。

時間的展望を形成する上で、重要な他者の存在が効果的に働くことを示す研究は多くある (比嘉・高良・岡本, 2005; 比嘉・岡本,

2007; 日潟, 2012; 鳥袋, 2007 他)。また、キャリア形成においても他者からの情報を得るという行為はキャリア探索行動を動機づけるものであるとされる (安達, 2010)。これらのことから、目標とする人がいるかどうかは未来の視野の広がりにも影響を与えると考えられた。その結果、目標とする人がいるとする者はいない者よりも未来の視野の広がり広いことが示された (日潟, 2015)。

以上の結果から、本研究では未来の視野の広がり人生への積極的な態度を生じさせ、それが未来の明るさに影響を与えることを仮定してパス解析を行う。さらに、それらに影響を与える要因として、クラブ・サークル活動、ボランティア活動、目標とする人の有無等のフェイス項目を投入し、大学生が未来の明るさを評価する上で影響を与える要因をとらえることを試みる (Figure 1)。

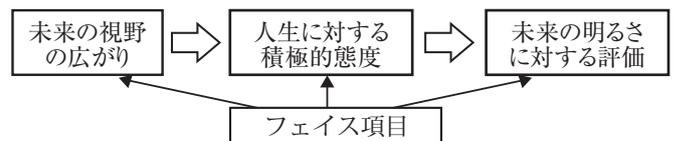


Figure 1 未来の明るさに対する評価へのパスモデル

2. 方法

(1) 調査時期

2016年11月-12月

(2) 調査対象者

関西圏下の私立大学1校の教育学部の大学生129名に実施した。回答に偏りがあるものと欠損値があるものを分析の対象から外した結果、分析対象者は96名 (男性46名, 女性49名, 不明1名, 平均年齢20.57歳, $SD=1.38$) であった。その内訳は、1年生18名 (男性9名, 女性9名), 2年生26名 (男性12名, 女性14名), 3年生23名 (男性13名, 女性10名), 4年生29名 (男性12名, 女性16名, 不明1名) である。

(3) 実施手続き

授業後に質問紙を配布し、回答は任意であることを伝え、同意を得た者にその場で回答をしてもらい回収した。実施に際して、某大学教育学部の研究倫理審査を受けて行った。結果の分析については、統計ソフト SPSS 23.0, Amos22.0 を使用した。

(4) 調査内容

① 未来展望の明るさ

「とても明るい」(7点) から「とても明るくない」(1点) の7件法で測定した。

② 未来展望の視野の広がり

Nuttin (1985) の INOM 尺度 (The Inventory of Motivational Objects) を参考に作成した日潟 (2015) の未来の視野の広がりをとらえる58項目を使用した。「あなたの未来を考えたとき、以下の項目について今のあなたはどのように考えていますか?」と教示し、「とても重要」(7点) から「全く重要でない」(1点) の7件法で回答してもらった。各下位因子の合計得点を算出し、項目数でわったものを下位因子得点とした。下位因子は、「社会的評価 (15項目)」「社会貢献 (14項目)」「自己実現 (11項目)」「自分らしさ (8項目)」「自己成長 (5項目)」「他者とのつながり (5項目)」である。

③ 人生に対する積極的態度尺度

海老根 (2010) が作成した人生に対する積極的態度尺度 (25 項目) を使用した。5 件法で実施し、点数が高いほど人生に対して積極的な態度を示す。各下位因子の合計得点を算出し、項目数でわったものを下位因子得点とした。下位尺度は「目標・夢 (5 項目)」「向上心 (4 項目)」「肯定的 (7 項目)」「時間重視 (6 項目)」「自分らしさ (以下、「自分らしさ (積)」とする) (3 項目)」である。

④ フェイス項目

学年、性別、年齢、中学校・高等学校・大学でのクラブ・サークルの所属状況、高等学校・大学でのボランティア活動の体験の有無、目標とする人の有無、職業選択の状況をたずねた。ボランティア活動については、学校からの強制ではなく自主的に行ったもののみを「有」として回答するように求めた。

3. 結果

人生に対する積極的態度尺度については既存の尺度であるため信頼性については検証されているが、未来の視野の広がりについては検証されていないため、クロンバックの信頼係数 α を算出した。「社会的評価」($\alpha=.91$)、「社会貢献」($\alpha=.87$)、「自己実現」($\alpha=.78$)、「自分らしさ」($\alpha=.75$)、「自己成長」($\alpha=.77$)、「他者とのつながり」($\alpha=.64$)であった。「他者とのつながり」についてはやや低い結果となったが、項目には意味のまとまりがあることから、そのまま採用することとする。

(1) クラブ・サークルの所属状況、自主的なボランティア活動の経験の有無、目標とする人の有無、職業選択の状況、および、未来の明るさの分布

クラブ・サークルの所属状況、自主的なボランティア活動の体験の有無、目標とする人の有無、職業選択の状況における分布を Table 1 に示す。中学校時にはほとんどクラブ・サークル活動を行っていた。また、高等学校時においても所属していた者が多かった。

Table 1 クラブ・サークルの所属状況、自主的なボランティア活動の経験の有無、目標とする人の有無、職業選択の状況の人数分布

	有		無	
	決定している	検討中	未決	
クラブ・サークルの所属	中学校	92	4	
	高等学校	77	19	
	大学	45	51	
ボランティア活動	高等学校	35	61	
	大学	60	36	
目標とする人	61		35	
職業選択	決定している	60	31	5
	検討中			
	未決			

未来の明るさに対する回答の分布を Figure 2 に示す。「とても明るい」から「やや明るい」までを「明るい」、「とても明るくない」から「やや明るくない」を「明るくない」とすると、「明るい」と回答した者の割合は 54.2% であり、「明るくない」と回答した者の割合は 32.3% であった。リクルートキャリア就職みらい研究所 (2016) の調査では、「明るい」とした者の割合は 41.7% であり、「明るくない」とした者の割合は 23.8% であった。本調査の被検者の

方が明るくとらえていた。

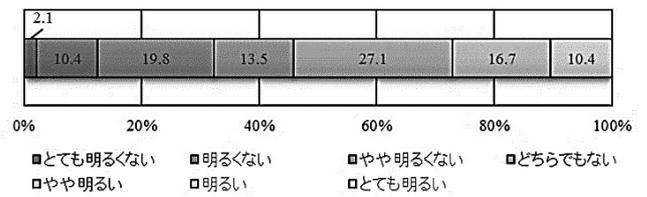


Figure 2 未来の明るさに対する回答の割合

(2) 中学校・高等学校・大学でのクラブ・サークルの所属状況における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の相違

中学校・高等学校・大学におけるクラブ・サークルへの所属の有無によって、未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度に違いがあるかをとらえるために t 検定を行った。

中学校では未来の視野の広がり「自分らしさ」にのみ有意傾向がみられ ($t(94) = 1.78, p < .1$)、所属していた者の方が所属していなかった者よりも高かった。高等学校では人生に対する積極的態度「向上心」にのみ有意傾向がみられ ($t(94) = 1.70, p < .1$)、所属していた者の方が所属していなかった者よりも高かった。大学においてはすべての下位因子において有意差はみられなかった。

(3) 高等学校、大学における自主的なボランティア活動の経験の有無における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の検討

高等学校時、大学時の自主的なボランティア活動の経験の有無において、未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の違いをとらえるために t 検定を行った。その結果を Table 2, Table 3 に示す。

Table 2 高等学校時の自主的なボランティア活動経験の有無による未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の平均値の比較

	有		無		t 値	有意確率	
	$n=35$	$n=61$	$n=35$	$n=61$			
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	$df=94$		
未来の明るさ	4.46 (1.58)	4.44 (1.60)	4.46 (1.58)	4.44 (1.60)	0.43		
未来の視野の広がり	社会的評価	5.34 (0.79)	4.92 (0.97)	5.34 (0.79)	4.92 (0.97)	2.22	$p < .05$
	社会貢献	5.61 (0.81)	5.20 (0.74)	5.61 (0.81)	5.20 (0.74)	2.54	$p < .05$
	自己実現	5.64 (0.64)	5.33 (0.61)	5.64 (0.64)	5.33 (0.61)	2.39	$p < .05$
	自分らしさ	6.11 (0.61)	5.94 (0.72)	6.11 (0.61)	5.94 (0.72)	1.17	
	自己成長	5.54 (0.84)	5.26 (0.99)	5.54 (0.84)	5.26 (0.99)	1.42	
人生積極的態度	他者とのつながり	5.65 (0.73)	5.40 (0.94)	5.65 (0.73)	5.40 (0.94)	1.35	
	目標・夢	4.02 (0.60)	3.82 (0.79)	4.02 (0.60)	3.82 (0.79)	1.32	
	時間重視	3.73 (0.75)	3.25 (0.73)	3.73 (0.75)	3.25 (0.73)	3.11	$p < .01$
	肯定的	4.02 (0.60)	3.75 (0.77)	4.02 (0.60)	3.75 (0.77)	1.77	$p < .1$
	自分らしさ (積)	3.93 (0.70)	3.93 (0.67)	3.93 (0.70)	3.93 (0.67)	0.03	
向上心	3.59 (0.83)	3.31 (0.97)	3.59 (0.83)	3.31 (0.97)	1.46		

Table 3 大学時の自主的なボランティア活動経験の有無による未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の平均値の比較

	有		無		t 値	有意確率
	n=60		n=36			
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	df=94	
未来の明るさ	4.57 (1.51)	4.25 (1.70)	0.95			
未来の視野の広がり	社会的評価	5.17 (0.87)	4.91 (1.02)	1.32	$p < .1$	
	社会貢献	5.46 (0.76)	5.16 (0.82)	1.82		
	自己実現	5.51 (0.65)	5.34 (0.61)	1.26		
	自分らしさ	6.05 (0.62)	5.91 (0.79)	1.02		
	自己成長	5.38 (1.01)	5.32 (0.83)	0.33		
	他者とのつながり	5.53 (0.82)	5.42 (0.96)	0.61		
人生積極的態様	目標・夢	4.03 (0.66)	3.67 (0.80)	2.36	$p < .05$	
	時間重視	3.56 (0.74)	3.19 (0.78)	2.30	$p < .05$	
	肯定的	3.99 (0.60)	3.61 (0.86)	2.35	$p < .05$	
	自分らしさ (積)	3.98 (0.69)	3.85 (0.65)	0.88		
	向上心	3.57 (0.87)	3.15 (0.97)	2.16	$p < .05$	

高等学校時においては、未来の視野の広がり「社会的評価」、「社会貢献」、「自己実現」に有意な差がみられ、ボランティア活動を行った経験のある者の方がいない者よりも高かった。また、人生に対する積極的態様においては「時間重視」に有意差がみられ、「肯定的」には有意傾向がみられた。どちらもボランティア活動を行った経験のある者がない者よりも高かった。

大学時においては、未来の視野の広がり「社会貢献」に有意傾向がみられ、人生に対する積極的態様の「自分らしさ (積)」以外の下位因子に有意差がみられた。それらすべてでボランティア活動を行った経験のある者がない者に比べて高かった。

(4) 目標とする人の有無における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の相違

目標とする人の有無によって、未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の違いをとらえるために t 検定を行った。その結果、未来の明るさにおいて有意差がみられ ($t(94) = 2.29, p < .05$)、目標とする人がいる者はいない者よりも明るいと評価していた。未来の視野の広がりについては有意差はみられなかったが、人生に対する積極的態様の「目標・夢」で有意傾向がみられ ($t(94) = 1.97, p < .1$)、目標とする人がいる者はいない者よりも高かった。

(5) 未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様との関連

未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の各下位因子の得点でピアソンの積率相関係数を算出した。その結果を Table 4 に示す。未来の明るさと未来の視野の広がり間には「自己実現」に弱い相関がみられただけであった。未来の明るさと人生に対する積極的態様との間には、すべての下位因子に相関がみられた。未来の視野の広がりとは人生に対する積極的態様の間には「社会的評価」、「社会貢献」、「自己成長」と「自分らしさ (積)」の間以外で相関が得られた。

Table 4 未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の相関

	未来の明るさ	人生に対する積極的態様					
		目標・夢	時間重視	肯定的	自分らしさ (積)	向上心	
未来の明るさ		.37 **	.37 **	.42 **	.31 **	.36 **	
未来の視野の広がり	社会的評価	.09	.24 *	.24 *	.28 **	.00	.27 **
	社会貢献	.07	.32 **	.32 **	.36 **	.08	.28 **
	自己実現	.21 *	.55 **	.31 **	.52 **	.25 *	.48 **
	自分らしさ	.14	.40 **	.37 **	.49 **	.28 **	.34 **
	自己成長	.12	.49 **	.43 **	.49 **	.13	.41 **
	他者とのつながり	.11	.37 **	.27 **	.55 **	.28 **	.32 **

* $p < .05, **p < .01$

(6) 未来の明るさへのパス解析の結果

未来の視野の広がり人生への積極的な態度を生じさせ、それが未来の明るさに影響を与えることを仮定し、さらに、フェイス項目がそのプロセスにどのように関連するかをとらえるために Figure 1 のパスモデルを仮定しパス解析を行った。適合度を示す指標は、 $GFI = .979, AGFI = .954, RMSE = .000$ であった。フェイス項目のクラブ・サークルの所属状況、ボランティア活動の経験の有無、目標とする人の有無についてはダミー変数 (有 = 1, 無 = 0) として投入した。有効であったパスのみを示したものが Figure 3 である。未来の明るさは人生に対する積極的態様の「肯定的」と、目標とする人がいることから有意な正のパスが得られた。また、「肯定的」には、未来の視野の広がり「自己実現」、「他者とのつながり」から有意な正のパスが得られた。加えて、大学時における自主的なボランティア活動の経験があることから有意な正のパスが得られた。「自己実現」については、高等学校時の自主的なボランティア活動の経験があることから有意な正のパスが得られた。

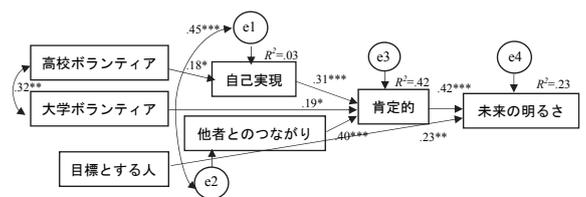


Figure 3 未来の明るさへのパス解析の結果 (* $p < .05, **p < .01, ***p < .001$)

4. 考察

(1) クラブ・サークルの所属状況における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態様の相違

先行研究において中学時代のクラブ活動によって、学校適応や他の学校生活の諸活動にもプラスの関連が生じることや集団体験が心理社会的発達に関連すること (河村, 2016)、クラブ活動を積極的に行っている者の自己効力感が高いこと (横井, 2011) などが示されている。本研究においても中学生時代にクラブ・サークルに所属していた者は所属していなかった者よりも未来の視野の広がりにおける「自分らしさ」に高い傾向がみられたことは、これらのことを反映しているとも考えられるが、所属していない者の割合はごく

少数であり、この点については今後さらに検討する必要がある。

高等学校時代のクラブ・サークル活動においては、人生に対する積極的態度の「向上心」において、所属していた者が所属していなかった者よりも高い傾向がみられた。高橋・今城（2014）では、中学校や高等学校で部活動が続けた者は高ストレス状況でも健康を保っていることが示されている。また、青木（2004）においても、高校でのクラブ活動は忍耐強い努力によって課題を解決し、目標を達成する経験を日常的に体験できる機会となっていることが示唆されている。クラブ・サークル活動において目標を達成しようと努力した経験から「日々、挑戦しようとしている」や「日々、自分を磨こうとしている」といった項目で構成される「向上心」が高い結果となったことが推測される。しかし、未来の視野の広がりには有意差はみられなかった。日潟（2015）においても高等学校でのクラブ・サークル活動の経験によって未来の視野の広がりには有意差はみられていない。本研究においてもほぼ同様の結果が得られたことは、高等学校時のクラブ・サークル活動の経験が直接的には未来の視野の広がりには影響を与えないと考えることができる。高等学校でのクラブ・サークル活動では対人スキル、自己効力感、忍耐力など社会に必要なスキルなどの獲得を促進するが、それらが未来の視野の広がりへと発展するには何らかの間接的な要因が関与するのかもしれない。

大学でのクラブ・サークル活動の所属の有無による有意差はすべてにおいてみられなかった。しかし、日潟（2015）においては、未来の視野の広がり「自分らしさ」以外のすべての因子で有意差、および有意傾向がみられている。本研究においては調査人数が少なく、また、先行研究によってクラブ・サークル活動に対する取り組みの程度などによって得られる効果が異なることが示唆されており、今後、調査データを増やし、取り組み状況を詳細にとらえ、検討していく必要がある。

(2) 自主的なボランティア活動の経験の有無における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の相違

高等学校時におけるボランティア活動の経験のある者はない者よりも、未来の視野の広がり「社会的評価」、「社会貢献」、「自己実現」を重要と考えていることが示された。山本・松井（2014）は、中・高校生はボランティア活動の経験によって社会に対する関心を高め、将来の仕事に対する意欲の高まりがみられるという結果を得ている。また、浦上（2015b）は中・高校生時におけるボランティア活動の有無、アルバイトの有無、職業体験の有無、将来の生き方や職業などについて考える機会を与えられた経験などを生活体験とし、職業観との関連を検討している。その結果、生活体験が豊かであるほど、職業の個人的側面や社会的側面に価値を認める傾向が高まることを見出している。本研究においてもこれを支持する結果となった。高校生においては、ボランティア活動を通して社会の中の自分をより意識し、社会とともに自分の未来を考える意識が高まること推測される。加えて、人生の積極的態度においては「時間重視」に有意差、「肯定的」には有意傾向がみられ、ボランティア活動の経験がある者はそれらの意識が高かった。「時間重視」の態度の項目は「毎日を大切に過ごそうとしている」や「常に有意義な時間を過ごそうとしている」などの項目で構成され、「肯定的」の項目は「人生において良い面に目を向けようとしている」や「明るい未来を信じようとしている」などの項目で構成されている。高校生の時にボ

ランティア活動の経験を行うことにより、未来の視野が広がるとともにそれにとまらぬ行動の変化が生じていることが示された。

大学時におけるボランティア活動の経験においては、未来の視野の広がりには有意差はみられなかったが、人生に対する積極的態度においては経験のある者には積極的な態度が生じていることが示された。日潟（2015）においても大学時のボランティア活動の経験の有無による未来の視野の広がりへの違いは得られていない。したがって、大学時におけるボランティア活動の経験は未来の視野の広がりよりも、実際の行動に影響を与えることが示唆された。新谷（2016）は男子大学生が書いたボランティア活動に対する振り返りノートや感想レポートを分析し、ボランティア活動を行う中で、自分が子どもの頃においても地域に育てられたことを思い出して感謝の気持ちを持ち、現在を肯定しながら将来に向かって養護性や積極性を発達させていくことをとらえている。本研究においても目標・夢への意識の高まりや、時間を大切に生きていこうとする態度や未来に対する明るさを信じる態度が生じていることが示されており、実際の行動を変化させる効果があることが示唆された。また、妹尾（2008）は、若者はボランティア活動を行うことによって自分自身の成長に関する成果を得ていることを示している。本研究においても「向上心」の高まりがみられたことから、ボランティア活動は自己に対する意識にも影響を与える可能性が示唆された。

ボランティア活動の経験が高校生にとっては未来の視野の広がりに関連し、大学生には人生に対する積極的態度に関連することが示されたことは興味深い結果である。発達の未来の視野の広がりや人生に対する積極的な態度を促すものとなること推測され、今後さらに検討する必要がある。

(3) 目標とする人の有無における未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度の相違

目標とする人がいる者はいない者よりも未来を明るい評価し、人生に対する積極的態度として目標や夢に向かって意欲的に取り組んでいることが示された。枝廣・小原（2017）は1～2歳年上の親しい友人的存在を「ナナメの関係」としてとらえ、ナナメの関係のような将来の自分と重ねられる人物が存在することで自分の未来に対して見通しを持つことができ、見通しを持つことによって、自分の進路選択に自信を持って進路に向けた努力をする傾向にあることをとらえている。島袋（2007）も高校生を対象とした研究ではあるが、意味ある他者の存在は仕事のやり方を従事する労働価値観を発達させ、個人的目標（なりたい自分）や社会的評価目標（周りの人から評価されたい）の形成を促すことを示している。ナナメの関係の人や意味ある他者が目標とする人となっていることが予測され、そのような人の存在がより具体的な未来を考えることを可能にし、未来の不安を低減させ、未来を明るい評価する要因となったと考えられる。

(4) 未来の明るさ、未来の視野の広がり、人生に対する積極的態度との関連

未来の視野の広がりや未来の明るさには「自己実現」以外には相関がみられなかった。この結果は日潟（2016）とほぼ同じ結果を示しており、未来の視野の広がりや未来の明るさの評価は直接的に関連しないと考えられる。しかしながら、未来の視野の広がりや人生に対する積極的態度の多くに正の相関がみられおり、日潟（2016）

においてもほぼ同様の結果が得られている。また、人生に対する積極的態度は未来の明るさの評価に正の相関を示したことから、未来の視野の広がりや人生に対する行動に変化を生じさせ、それが未来に対する明るさの評価に影響を与えている可能性が示された。杉山(1994)は、未来展望システムのモデルを検討する中で、未来の目標群が個人の生活空間内に存在しないときは未来展望システムの機能を十分に果たすことができないとしている。未来の視野の広がりや人生に対する意識を体感することが実際の生活になれば未来の明るさを生じさせることにはつながらないことが推測される。

(5) 未来の明るさへのパス解析の結果

未来の明るさに直接的な影響を与えるものは、人生に対する積極的態度の「肯定的」であった。人生に対する積極的態度の「肯定的」とは「人生において良い面に目をむけようとしている」や「期待をもって生きようとしている」などの項目で構成されており、そのような意識を持つ者は未来を明るいと評価することは妥当な結果であると考えられる。

その「肯定的」な態度を生じさせる未来の視野の広がりや「自己実現」への意識と「他者とのつながり」を大切だとする視野の広がりであった。未来の視野の広がりや「自己実現」因子は、「自分の中にある計画やプロジェクトを実現すること」や「難しい課題に取り組むこと」、「ある活動に自分をささげること」などの項目で構成されている。未来に対してこのような意識を持っている者は自分の人生をポジティブにとらえることができることが示された。「他者とのつながり」については、石川(2011)は他者とのかわりに肯定的な効果を感じている者は、将来に希望と目標を持ち、現在に空虚感を感じていないことを示している。また、日淵(2014)では未来が明るいと考える理由について、「大切な人たちと出会って、これからもその人たちとかわりながら生きていくと思うと幸せだから」「人とのかわりがあるから」「少しは不幸なことがあっても友人などがついていてくれて、明るく生きられるなと思ったから」などの記述が得られている。他者と一緒に歩んでいくという意識によって未来への不安が低減され、それが自分の人生や未来を肯定的にとらえる原動力になり、未来を明るくとらえることにつながったと考えられる。

フェイス項目については、目標とする人がいることが未来の明るさに直接的に影響を与えていた。前述した枝廣・小原(2017)の教員養成課程の大学生を対象とした研究では“ナナメの関係”が可能自己となる可能性を示唆している。また、枝廣(2012)は高校生を対象とした研究ではあるが、“ナナメの関係”の友人がいる者は目標指向性が高く、希望も高いことを示している。この視点から考えると、“ナナメの関係”が自分の目標とする人となって、現在の自分と未来の自分を結びつけるものとなり、未来を明るく評価することにつながっているととらえることもできる。

大学時の自主的なボランティア活動の経験は肯定的な態度に影響を与えた。ボランティア活動による成果として高齢者は人間関係の広がりや人生に対する意識を体感することが実際の生活になれば未来の明るさを生じさせることにはつながらないことが推測される。

山本・松井(2014)はボランティア活動への参加の動機は中・高校生では他者志向の動機から自己志向への動機へと発達変化することをとらえている。したがって、高校生においては自己志向性による視点をもってボランティア活動の経験をすることで、より自己実現への意識が高まる機会となったとも考えられる。猿渡(2015)は文献研究からボランティア活動への参加は社会的連帯や社会的集団への愛着、公共的活動への参加などによって動機づけられ、ボランティア活動の経験が新たな連帯や愛着の経験を可能にするという循環構造があると述べている。本研究では自主的なボランティア活動に限定したため、有ると答えた者にはこのような循環構造が生じていることも示唆され、その結果として高校生においては未来に対する視野が広がり、大学生においては人生を肯定的にとらえる態度が生じることを促したとも考えられる。しかし、妹尾(2008)では、活動参加が自発的な意思決定であるかどうかにかかわらず、ひとたび活動に参加し、その活動を通じて自らの行動の役立ちが実感できれば、活動に満足し、活動継続の動機づけとなることが示されている。したがって、ボランティア活動を高校生や大学生に体験させることにより、猿渡(2015)が述べる循環構造が形成されるとも考えられ、そのような体験が間接的に未来の明るさを感じさせるものとなる可能性が示唆された。

5. 今後の課題

本研究において、パス解析を行い未来の明るさの評価に影響を与える要因、およびそのプロセスを具体的に提示できたことは、今後の青年期の未来展望の形成、および未来をポジティブにとらえることができる支援を考える上での示唆を与えるものであると考える。しかしながら、調査人数が少ない点、クラブ・サークルの所属についてはデータにかなりの偏りがあったことなどを考慮して検討する必要がある。今後は、複数の大学で様々な学部・学科の学生を対象に行い、本研究の結果をさらに検討していく必要がある。

引用参考文献

- 安達智子(2003). 大学生の職業興味形成プロセス—手段性・表出性、自己効力感、結果期待の役割について— 教育心理学研究, 51, 308-318.
- 安達智子(2010). キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81, 132-139.
- 青木邦夫(2004). 高校運動部員の充実感変化に関連する要因の分散構造分析 山口県立大学社会福祉学部紀要, 10, 113-128.
- 新井洋輔・松井 豊(2003). 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向 筑波大学心理学研究, 26, 95-105.
- 中央教育審議会(2002). 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/0/toushin/1287510.htm (平成29年10月21日)
- 海老根理絵(2010). 青年期における人生に対する積極的態度に関する研究 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50, 149-158.
- 枝廣和憲(2012). 「斜め(ナナメ)の関係」が高校生の未来に対する時間的展望に与える影響:ピア・サポートプログラム開発のための基礎的研究 ピア・サポート研究, 9, 1-6.

- 枝廣和憲・小原 豊 (2017). 教員養成課程における進路選択自己効力と未来に対する時間的展望(未来展望)および斜めの関係(ナナメの関係)の関連 大学教育学会誌, 39 (1), 101-106.
- 比嘉麻美子・高良美樹・岡本祐子 (2005). 「意味ある他者」の存在と大学生の未来展望との関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 4, 78-89.
- 比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス 広島大学心理学研究, 7, 227-243.
- 日潟淳子 (2012). 青年期における重要な他者の存在と時間的展望との関連-重要な他者尺度の作成- 日本発達心理学会第23回大会発表論文集, 198.
- 日潟淳子 (2014). 大学生の自己の未来展望に対する評価についての判断要因の検討 近大姫路大学教育学部紀要, 7, 167-174.
- 日潟淳子 (2015). 大学生の未来展望の視野の広がりとその関連要因の検討 近大姫路大学教育学部紀要, 8, 109-114.
- 日潟淳子 (2016). 大学生の未来の明るさと未来の視野の広がり, 人生に対する積極的態度和との関連-学年による変化の視点から- 姫路大学教育学部紀要, 9, 119-126.
- 稲田達也・鈴木由美 (2015). 中学校・高校の部活動経験が大学生の社会人基礎力に与える影響 日本教育心理学会第57回発表論文集, 578.
- 石井茜恵 (2011). 大学生の時間的展望と他者の影響の認識の関連 日本パーソナリティ心理学会第20回大会発表論文集, 111
- 河井 亨 (2012). ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか-全国大学生調査の分析から- ボランティア研究, 12, 91-102.
- 河村明和 (2016). 日本の中学校の部活動が生徒の心理社会的発達に及ぼす影響に関する研究の展望 学級経営心理学研究, 5, 75-81.
- 内閣府青少年企画 (2013). 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 内閣府
- Nuttin, J. (1985). *Future Time Perspective and Motivation: Theory and Research Method* Leuven: Leuven University Press
- リクルート就職みらい研究所 (2013). 大学生の将来イメージ編-大学生価値意識調査(2012)より- 株式会社 リクルートキャリア コーポレート戦略総括部 広報グループ
<http://data.recruitcareer.co.jp/research/2013/04/post-b9fd.html> (2017年9月6日)
- リクルート就職みらい研究所 (2016). 大学生の実態調査2016-大学生の将来イメージ編- 株式会社 リクルートキャリア 広報部
<http://data.recruitcareer.co.jp/research/2016/02/2016-68ec-1.html> (2017年9月6日)
- 猿渡 壮 (2015). ボランティア活動への参加をもたらすもの 評論・社会科学, 114, 35-51.
- 関 文恭・吉田道雄・篠原しのぶ・吉山尚裕・三角恵美子・三隅二不二 (1999). 働くことの意味に関する国際比較研究-5カ国の大学生の比較- 九州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 1-10.
- 妹尾香織 (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部京急紀要, 16, 35-42.
- 妹尾香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助効果 社会心理学研究, 18, 106-118.
- 島袋恒男 (2007). 高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 70, 55-68.
- 新谷和代 (2016). 地域でのボランティア活動を通じた青年期の発達についての事例検討-ある男子学生の「振り返りノート」の分析から- 帝京大学心理学紀要, 20, 43-70.
- 白井利明 (2015). 高校生のキャリア・デザイン形成における回想展望法の効果 キャリア教育研究, 34, 11-16.
- 杉本英晴 (2012). 何のために働くのか 若松養亮・下村 英雄 (編) 詳説 大学生のキャリアガイダンス論 (pp.43-58) 金子書房
- 杉山 茂 (1994). 青年期における未来展望と適応-期待理論によるアプローチ- 立教大学心理学科研究年報, 37, 65-75.
- 高橋桂子・石井藍子 (2008). 大学生生活・就職活動が自己効力感に与える影響 新潟大学教育学部附属実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究, 7, 47-55.
- 高橋悠佳・今城周造 (2014). 大学生の過去の部活動経験とハーディネスとの関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 16, 59-67.
- 都筑 学 (2007). 大学生の進路選択と時間的展望-縦断的調査にもとづく検討- ナカニシヤ出版
- 浦上正則 (2015a). 大学生の職業観と職業不決断-尾高 (1941) による職業の定義に基づいた職業観の把握- 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 9, 41-56.
- 浦上昌則 (2015b). 中高生時代からのどのような生活経験が大学生の職業観に影響するのか 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 10, 31-44.
- 山口洋典 (2009). 自分探しの時代に承認欲求を満たす若者のボランティア活動-先駆的活動における社会参加と社会変革の相即を図る「半返し縫い」モデルの提案- ボランティア研究, 9, 5-57.
- 山本陽一・松井 豊 (2014). 中高生のボランティア動機, ボランティア活動の援助成果の探索的検討-感想文の内容分析を通して- 筑波大学心理学研究, 47, 37-45.
- 横井彩奈 (2011). 神奈川県内の公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告 第3部 第2章 部活動が与える自己効力感への影響-達成場面と人間関係に着目して- ベネッセ教育総合研究所研究所報, 60, 122-132.

